

謎の月坂弥三郎

なぞ つきさかや さぶろう

上齋原と奥津の境にある、三ヶ上（標高一〇六二m）は、その頂上から伯耆・因幡・備前の三国を見渡すことができることからこの名が付いたといわれ、古くから修験道の霊地で、現在でもそれにちなむ伝説や文化財も残されています。

その一つに、修験道の開祖とされる役行者の石像（町指定文化財）があります。この石像には次のような銘文が彫られています。

備後神閑郡相戸邑

世話人 月坂弥三郎

天正元年酉四月日

備後国神閑郡相戸邑（村）とは、

現在の広島県東北部にある神石郡神

石高原町相渡にあたります。天正元

年（一五七三）は、織田信長が室町

幕府將軍・足利義昭を京都から追放

し、天下布武への道を歩み始めた頃

です。こうした時代に、わざわざ隣

国からこの石像を奉納した月坂弥三

郎は、一体どのような人物で、なぜ

ここに石像を奉納したのでしょう。

現在、神石高原町一帯には月坂の姓はなく、その素性は不明です。しかし、天正元年の中国地方では、毛利元就の次男・吉川元春が山陰の因

幡・伯耆（現在の鳥取県）を平定し

ており、この時に三男・小早川隆景

が吉川元春の陣中に出した書状には、

「奥津・才原」に使者を待たせるこ

とが書かれ、当時奥津・上齋原地域

は毛利家の支配下にあったことがわ

かります。備後国神石郡も当時毛利

家の支配下であったことから、月坂

弥三郎という人物は、毛利家に関わ

りのある人物と推定できます。

「陰徳太平記」や「雲陽軍実記」な

ど山陰の戦乱を描いた書物には、山

陰の大名・尼子家の家臣で、相戸村

から中国山地を越えてほぼ北に六〇

キロの位置にある出雲国能義郡月坂

（島根県安来市）の月坂城を拠点と

していた豪族・月坂助太郎という人

物が登場します。

この月坂助太郎は永祿九年（一五



三ヶ上

六六）、尼子家滅亡後は国外に退散

したようですが、山中鹿之助らが尼

子勝久を擁して尼子家を再興した際

には、その家臣として播州上月城（兵

庫県佐用町）に籠り毛利軍と戦って

おり、天正六年（一五七八）上月城

落城後の行方は定かではありません。

米子市の郷土史家の調査によれば、

毛利輝元（毛利元就の孫）の家臣の

中に、関ヶ原の戦い（一六〇〇）で

毛利家が敗戦した後に浪人となった

月坂源兵衛という人物がおり、出雲

国能義郡月坂が故郷であると伝わっ

ていることから、同じ一族である可

能性もありますが、残念ながら月坂

弥三郎という人物についての記録は

ありません。

しかし想像を膨らませば、尼子家

滅亡後、月坂一族の一人であった弥

三郎が中国山地を越えて相戸村へ移



役行者像（左）と側面の銘文（右）



月坂城跡（島根県安来市）

住し、毛利家へ仕えたことも考えられますし、上齋原が古くからたたら製鉄が盛んであったことから、この石像は毛利家による鉄山（製鉄）経営との関連を推定する見方もあります。すから、製鉄の総本山ともいえる能義郡の出とされる月坂氏であれば、毛利家から上齋原の鉄山経営を任せられた可能性も考えられるでしょう。

ただ、天正元年は七月から改元されていますので、石像に刻まれる「天正元年四月」という年月は実際には存在しません。こうしたことから考えてもこの石像奉納の歴史的背景にはまだまだ謎があります。

参考資料：『上齋原村史』、『鏡野町の文化財』、『尾高の里』、『月坂助太郎伝』

生涯学習課 日下

電話（0868）54-7733